

情報技術の教育利用に対するメディア論的視点

京都大学文学研究科二十世紀学専攻 博士後期課程 松下慶太

e-mail: quito-keita@nifty.com

はじめに

情報技術と教育は、常に密接な関係にあった。しかしながら、それが利用される学校・教室という空間そのものへの関心は驚くほど低かったのではないだろうか。今日におけるコンピュータ・インターネットの教育利用に関しても、技術的な研究・教育実践はこれまで数多くなされてきた。その背景には情報技術による教育への働きかけを重視する技術決定論的な姿勢が伺える。このことを踏まえた上で、報告では、以下の二点を論点の中心とする。

- 情報技術が利用される教室という空間の歴史的考察
- 教室におけるメディアについて

具体的には、特に初等中等教育における教室という空間の成立に関して歴史的に見直し、教室における情報伝達の中心である教師をひとつのメディアと位置づけ、メディア環境としての教室という視点から情報技術の教育利用について考察する。

1. 教室という空間の成立

現在、考えられているような教室の嚆矢は、1872年（明治5年）に学制が公布され、日本において西欧的な近代学校制度が成立していった過程の中に求めることが出来るだろう。このような近代学校制度が日本中に行き渡り、また、実際に就学率が90%を超えるのが20世紀に入ってからである。そういった意味で、教室という空間はここ100年程度の比較的新しい空間である。こうして出来上がっていった教室という空間の特徴は、均質性と画一性である。これに関しては、教授法の変化によるところが大きい。すなわち、寺子屋で行われていたような個別学習から一斉授業への授業スタイルの変化である。一斉授業による教育の必要性から、カリキュラムや時間割の均一化が図られ、教室においても均質性と画一性が求められたのである。

このように、均質・画一というように特徴づけられる空間である教室は、ヨーロッパにおいて誕生した、と言われている。その空間構成は、近代という時代の性質と密接に結びついたものであった。M. フーコーは『監獄の誕生』で、17世紀から18世紀のヨーロッパにおける学校を規律・訓練が行われる場として捉えた。そして、このような規律・訓練が行われるには、学校以外の病院や軍隊、工場などと同様、「閉鎖を、つまり他のすべての者には異質な、それじたいのために閉じられた場所の特定化を要求」するのであった。規律・訓練のための方策として、空間への各個人の配分には注意が払われた。フーコーは18世紀後半以降、学校における学級が均質的になっていった背景として、特に、生徒の年齢や成績、品行など、系列本位による空間編成がなされたことを指摘している。

これと同様のことが、19世紀後半から20世紀にかけて近代化を目指す日本の学校においても行われたのである。1875年（明治8年）に出版された『小学校教師必携』にお

いて「教場ニ在テ、教師ノ座位ハ、床板ヨリ五六寸許高ク構ヘテ、全室ノ生徒ヲ査スルニ便ナルヲ要ス」、「教場ニ於テ、生徒ノ机ヲ排列スルニハ、教師ノ一見シテ、全室ノ生徒ヲ通覧スルニ便ナルヲ要ス」とあるように教室（教場）においては、教師による生徒全体の管理を可能にするように空間が構成されている。このように、教室の空間構成そのものが近代的な価値観を支えている基盤となっていた。このことは、均質・画一をよしとする近代的な価値観からの脱却を計ろうとする現在の教育において重要な視点である。

2. 教室におけるメディア

この報告におけるメディアについて、さしあたっての定義を与えておこう。「メディア」とは情報（コンテンツ）伝達の「媒介」である。

私たちが教育におけるメディアとしてまず思い浮かぶのは教科書であろう。実際に、教科書は近代教育の中で中心的なメディアとして取り扱われてきた。印刷技術による教科書の普及こそが教室という空間に加え、一斉授業など近代教育における基盤となる要素を可能にしたのである。

教科書というジャンルの書物ができたのは16世紀中頃であった、と言われている。教科書は、それまでの教育の中心であった対話や説法がそうであったように論争的ではなく、『事実』や『事実』のように考えられるものを提示していた。そこには教科書それ自体の外部との相互作用はなく、ある主題についての問題点や疑問点、反対論などはいっさい載せられなかった。このような要素は、人の手によって「書く」ことから、機械による線的で連続的な「印刷」に移行する中でよりいっそう強められていった。

B. アンダーソンは『想像の共同体』の中で、新聞などのように大量に印刷されたものが資本と結びついた出版資本

主義が近代の国民国家の成立の技術的手段を提供した、と指摘している。それは先に述べた均質・画一を基盤とする近代的な価値観と深く結びついていたのであった。

3. メディアとしての教師

教科書以外にも黒板や掛図など、さまざまなメディアが教室に導入された。さらに、見落とされがちであるが、メディアが情報（コンテンツ）伝達の「媒介」であるなら、それらのメディアを使い、また自らの音声や存在自体で情報（コンテンツ）を伝達する教師もまたメディアである、と言えるだろう。

「教師は 衆目環視の中心となって 一挙一動悉く衆生の耳目に伝達することは 恰も中央電信局より 電線の各支局に架設せられて 一時に各所に音信の通ずるが如く あって欲しい。」

これは明治41年に出された『教壇上の教師』の中の一節である。『教壇上の教師』は20世紀の初頭に書かれた教師論であるが、そのなかですでにメディアとしての教師という見方がなされていたのは興味深い。ここで教師に対して中央電信局という比喩を用いていることから、マス・コミュニケーションとしての教師を位置づけている。

明治以降、学校には幻燈機、ラジオ、テレビ、コンピュータなど現代の情報技術に至るまで、様々な新しいメディアが熱心に導入された。その目的については様々であるが、結果として、それぞれのメディアが、教師が教科書を用いて教える、という授業スタイルを補強するという意味においては成功しているものは多い。しかし、従来の授業スタイルの変革をなし得たか、という意味では、どのメディアも成功とは言い難い。言い換えると、それほど教科書と教師は決定的なメディアなのである。

このような授業スタイルの変革という意味での教室へのメディア導入が失敗した一因は、導入する側の情報技術に目を向けるような技術決定論的な志向が強かったことが考えられる。実際には、導入される側の教室という空間や、そこで用いられる教科書や教師までを含めたメディアがどのように構成されているか、についての視点が欠けていたのではないだろうか。

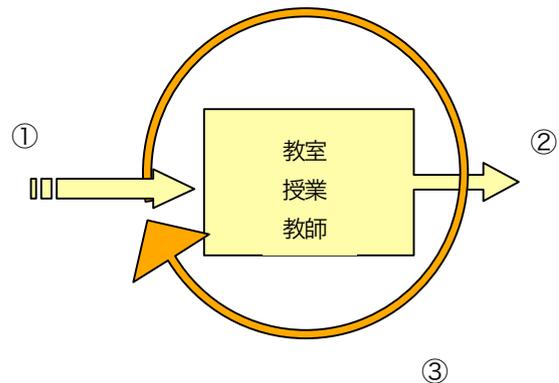
4. 情報技術と教育の情報化

以上のような視点は、急速な勢いでコンピュータ・インターネットなどの情報技術が学校や教室に導入されつつある現在において、より重要な問題として浮かび上がってくる。というのも、コンピュータ・インターネットといった情報技術は情報の伝達という意味だけではなく、情報のあり方そのものの変化を示唆しているからである。

情報技術の教育利用において、メディアによる教育の拡張志向は、①インターネットやテレビなどによる教室への

情報（コンテンツ）の取り込み、②通信教育、遠隔教育など教室空間の拡大、③インターネットやテレビ会議システムなどを利用した協調学習など①と②の複合、に大別できる。（図参照）①はともかく、特に②、③のように、今日の情報技術によって、それまでメディアであったもの（教師や授業、あるいは空間そのもの）が情報（コンテンツ）化した時に、その情報（コンテンツ）がどのように構成されてきたかを十分に考慮することが求められる。教育の情報化が、既存の教育からの脱却を目指したものであるならばなおさらであろう。

【図 メディアによる教育の拡張志向】



5. 「教育美学」という提案

それでは、教育の情報化を進める中で、我々は教科書や教師をどのように考えていけばよいのか。

新たなメディアが登場し、普及することで、それまでのメディアを「芸術」として評価する懐古主義はこれまでもしばしば見られることであった。写真が登場した後の絵画、あるいはテレビの登場した後の映画のように、教育においても今後は、情報技術によって、教師による一斉授業というスタイルも懐古され、「芸術」になるかも知れない。

ただし、それは古くさく時代遅れという意味では決してない。懐古主義や「芸術」を積極的に評価していけるような、いわば「教育美学」の模索が、情報技術の発展と並んで同時に追求されるべきもうひとつの筋道ではないだろうか。

【参考文献・資料】

- (1) B. アンダーソン『想像の共同体』（増補版）NTT 出版, 1997
- (2) M. フーコー『監獄の誕生』新潮社, 1977
- (3) W. オング『声の文化と文字の文化』藤原書店, 1991
- (4) 加藤末吉『教壇上の教師』（明治・大正教師論文集成）ゆまに書房, 1990
- (5) 諸葛信澄『小学教師必携』（明治・大正教師論文集成）ゆまに書房, 1990
- (6) 文部科学省『学制百年史』

(<http://www.wpi.mext.go.jp/v100nen/>)